

# 医療用ウィッグ手順に

人毛の医療用ウィッグを手頃な価格で、自分になじむスタイルで身に付けてほしい。そんな願いをかなえようと挑むスタートアップ企業がある。その名も「SUMIKIL(スミキル)」(東京都)。鎌倉在住でがんを経験した野中美紀代表(51)が2年前に設立。中国から直接買い付けることで価格を抑え、美容師の協力を得て購入者の希望に沿ってカットして届ける。「髪が抜けるのが嫌で抗がん剤治療を受けるのをためらう若い人も多い。ウィッグを普段着にしたい」とその輪を広げている。(西郷 公子)

## ■悩む日々

野中代表が遺伝性乳がん卵巣がん症候群と診断されたのは10年前。米国の女優アンジェリーナ・ジョリーさんと同じ、遺伝子変異で特定のがん細胞を阻害する免疫細胞が体内で作れない体質だった。4歳上の姉が乳がんになったことがきっかけで診断を受け、その翌年に自身も乳がん

経済  
最前線

■スタートアップ編■

SUMIKIL



SUMIKIL  
野中美紀代表

が見つかった。早期発見だったが、進行が早く、予防措置として乳房や卵巣を摘出。術後、仕事に復帰したものの、治療による脱毛期間が長く、買ってきたウィッグは明らか

## 購入者の希望でカット

にそれと分かる見た目で悩みが募った。

### ■髪を着る

そんな中、担当の美容師さんが「大丈夫だよ」と声をかけてくれ、野中さんになじむスタイルにウィッグをカットしてくれた。その時の晴れ晴れとした澄み切った心持ちが起業の原点。社名にはそんな気持ちと普段着として「髪を着る」の意味を重ねた。その体験に加え、20個近くウィッグを試した経験から、野中さんの挑戦が始まった。人毛の医療用ウィッグの相場は10万〜30万円と高額。人工毛は値段こそ手頃ながら、装

束、価格を3万〜4万円台に抑えることが可能になった。

### ■社会貢献

当初から強力でバックアップしてくれたのが横浜市緑区で「メゾン・ド・ナリタ」を運営する美容師の成田雄孝さん(39)だ。成田さんはシャンブリームリエ認定講師の資格を持つ抜け毛対策などのプロ。販売前のサンプルのウィッグが長く健やかに保てるか、それにはどう管理すべきか、1カ月半、毎日浴室に入り洗って試した。

そこで思いついたのが、以前卓球メーカーの総合職として働いていた時からつがある中国工場との直接取引だ。中国は人毛ウィッグの世界でトップシェアを誇る。交渉の



部分ウィッグを着けている野中代表の髪を整える成田さん  
＝横浜市緑区のメゾン・ド・ナリタ

この2年で提携先の美容室は全国24店舗に広がった。県内は成田さんの店と「トライアングルヘア&オーガニック」(茅ヶ崎市東海岸北)の2店舗。スミキルの昨年の販売台数は通販を含め月平均70〜80台。脱毛症に長年悩んでいる人からの反響も大きい。自治体によって医療用ウィッグには購入補助もある。利用者は着実に増えている。野中さんには一人娘もいる。「もしかすると娘にも遺伝しているかもしれない。だとしたら娘たちの時代にはウィッグが当たり前の文化になるように続けたい」

### ■協力の輪

「協力する美容師の多くは社会貢献としてやりがいを感じている。最初の頃はコロナ禍だったこともありやってみる価値を感じたが、もし自分のお客さんに相談されたら、なんとかしてあげたいと思うのが美容師」と成田さん。

1トで、店舗を持たないことも価格が低く抑えられる理由の一つだ。通販では成田さんを含む6人の美容師が、購入後のウィッグを画像の提供や希望を受けて加工。一方、提携美容室は、購入者に来てもらいウィッグを着けた上で美容師が希望を聞きながらカットや加工を施す。ウィッグの価格にはその技術料も含まれるという。